

「スサノオノミコトと ヤマタノオロチ」



記憶の過去
と学び

京都生涯学習カレッジ 子どもと親の神話 カムスホール

アマテラスの弟のスサノオノミコトは、姉のアマテラスがお隠れになった時、どれほど悲しくどれほど寂しく、どれほど苦しかったことか。全ての罪は俺にある。悔やんでも悔やんでも悔やみきれない。

何年か経った後に、突然漆黒の世界の暗闇から、一条の光が岩戸のほうから射した。八百万の神々の力で、やっと姉のアマテラスの心とからだを岩戸をお開けになった。

俺は、懐かしさと嬉しさと、姉に会いたい一心で、駆け寄ろうとしたが、屈強な神々に取り押さえられてしまった。髪の毛をむしり取られ、十本の指の爪をはがされ、足の爪をもはがされてしまいました。

「スサノオよ。お前がいては、アマテラスの素晴らしい光を望む事ができない。みんなの意見は、お前を追放することだ。この天界から追い出す事に、みんなが決めている。」と、俺の体をぐるぐると回しながら、高天原から、蹴落とした。

真っ黒の世界を、矢のようにぐるぐる回りながら急降下した。すべての皮膚は何かにつっ張られるように伸び、引きちぎられるような感覚になった。

どれほど、経つだろうか。気がついたときには、姉の光に照らされた岩のてっぺんに立っていた。もう痛みも無い。むしろ髪は前のようにふさふさとしており、引きちぎられた指の爪も、以前のように輝いていた。体はすっかり元気になったけれども、この虚しさと寂しさはなんだろう。今までに感じた事が無い辛さだ。誰かにすがりたい。

とぼとぼひとりぼちで山を下ると、小さな川があった。川は私を癒すように、足を撫でてくれる。俺が泣きわめいてばかりいたときに、姉はいつも、私を悲しそうに見ていた顔が、川の中に浮かんでいる。ひとりぼちになっちゃった。

そのとき、川上から岩に当たり、渦の中に入り、ぐるぐると回りながら箸が流れてきた。「おお、人がいる。会いたい。」俺は無我夢中で、川上へ走りだした。

「おまえとは、今日でお別れだ。姫よ。お前と別れるのは大変つらい。しかし今日はヤマタノオロチが年に一回やってくる日だ。最後のおまえまで無くしてしまうかと思うと、父も母も、この悲しみは言葉にできない。」

娘は、袂で涙を拭きながら、父と母の手を片手で握りしめていた。「おまえたちは、何故そこで泣いているのだ。」

「見知らぬお方よ。私の悲しみを、苦しみを聞いて下さい。」と、手摩乳と脚摩乳の神が、涙ながらに

その国の
子ども達が
その国の神話を、
十二、三歳までに
学ばなかったら
その国は
滅びるだろう

Skype
スカイプ
受講受付中！

お申込みは
スタッフ 木村佐稚子 090-1920-9422

スサノオに訴えました。

「今夜ヤマタノオロチが、私の八番目の大事な姫を食い殺しに来ます。これは、だれも、どうすることもできない運命です。」と泣き崩れた。

「よし、わしが助けてやろう。その代り、その美しい娘を俺にくれ。」

「どなたかわからないものに、大事な娘を嫁にやるわけにはいきません。どうぞあなたの身分をお知らせください。」

「俺は、アマテラスの弟のスサノオである。通りすがりにおまえらの話を聞いて、見過ごすわけにはいかない。俺がきつと助けてやる。」

スサノオは、胸を張り、一瞬にクシナダヒメを櫛に変え、髪に挿しこみました。

「この姫のために、ヤマタノオロチを退治しよう。八つの囲いをつくれ。そしてそれぞれに穴を掘れ。そして、強い酒をその中に入れる。」と命じました。

手摩乳、脚摩乳の神は、訳が分からんが、この人が助けてくれる予感がした。きっと助かるに違いない。二人は、人々を掻き集め、垣をつくり、穴をほり、お酒を入れた。

どこからともなく、地響きがしだした。スサノオは、十握の剣を抜き、背中に挿しこんだ。音はだんだん大きくなり、地を這う音や、八つの頭を持った、ヤマタノオロチが、それぞれ唸り声をあげるので、あたりは、草も木も揺れ動きだした。

あたりの人々も、倒れそうになるほどの突風がそこらじゅうに巻き起こりました。人々は、木の陰に隠れ、ただ一人スサノオは仁王立ちになって、ヤマタノオロチが酒を飲み、吠えている姿を睨みつけていました。

しばらくすると、八つの頭の動きが鈍り、だんだん穴の中に首を突っ込んだまま動かなくなりました。八つの尾っぽも、しなびた大根のように、大人しく地面にへばりついてしまいました。

スサノオは、十握の剣で、ひとつずつ首を切り落としました。真赤な血が吹き出しました。しかし、ヤマタノオロチは、ぐたつとなり、抵抗することができませんでした。スサノオは、オロチの体に飛び乗り、八つ裂きにしました。真ん中の尾っぽを切ったときに、カチつと音がして、十握の剣の刃が欠けてしまいました。中を見ると、光り輝く剣が出てきました。

すばやく取り出し、井戸でその刀を洗ったら、ますます辺りが光輝く光を放しました。

なんと素晴らしい刀だ。俺はいつも姉上を困らせていたお詫びに、アマテラスに献上しよう。櫛に変えたクシナダヒメを元に戻し、島根の出雲の国に向かいました。

K